

# 説経「小栗判官」における青墓

——絵巻『をくり』の詞書を中心に——

小松 暁子

はじめに

説経とは、中世末から近世にかけて隆盛した語り物である。その成立過程は不詳な部分も多いが、路上などでささらと呼ばれる道具を使いながら、聴衆へ語る形態がはじまりだと伝えられる。

説経作品の中でも代表的な作品は「五説経」として挙げられており、本稿で扱う「小栗判官」もその一つに数えられている<sup>(1)</sup>。物語では、宿敵によって醜い姿にされた主人公・小栗が、本復のため熊野を目指し、一方、その妻・照手姫も人買いにその身を売られ、各地を漂流していく。悲哀に満ちた二人の流離は聴衆の涙を誘い、物語が帯びる哀感も作品における趣向の一つと言えるだろう。

照手姫が身を売られ、たどり着く先は青墓の遊女宿である。青墓は、漂浪の月日を送った小栗と照手姫が再会を果たし、物語が展開を遂げる場所である。

では、なぜ青墓が物語の重要な土地として機能しているのだろうか。これまで「小栗判官」の先行研究では、青墓を拠点として活動

していた傀儡子と呼ばれる漂泊民について論点が集中していた。先行研究では、彼らが物語の語り部として「小栗判官」の成立に関与したと論じられてきたが、傀儡子が活動したとされる時期と「小栗判官」の隆盛時期には年代的な隔りがある。傀儡子がどこまで「小栗判官」の成立に関わっているのかは模倣としており、より多面的な検討が必要であるだろう<sup>(2)</sup>。

また、「小栗判官」には寛永後期から明暦頃の成立とされる絵巻『をくり』のほか、複数のテクストが残されており、その中でも絵巻『をくり』と奈良絵本『おくり』については、古い詞書の特徴<sup>(3)</sup>（浄瑠璃の様な六段の段別がされていないこと<sup>(4)</sup>、②「てに」という特殊な用例が頻出すること<sup>(5)</sup>、③冒頭に中世の宗教的色合いを残す「本地語り」を持つこと）が顕著に見られる。横山重氏は、絵巻『をくり』と奈良絵本『おくり』の両者以前に、「原・小栗判官」ともいえる最古の正本らしきものが存在し、両者はそれぞれ目的と用途に応じて内容を取捨選択して詞書を作成したのではないかと言及している。さらに横山氏は、絵巻『をくり』の方がより原初的な詞書を残しているかと推測した<sup>(6)</sup>。横山氏の論をはじめ先行研究では、絵巻『をくり』の詞書が、諸本の中でもより古態を有すると位置づけられている<sup>(7)</sup>。

そこで本稿では、詞書に古態性を残し、最も長大な内容を備えた絵巻『をくり』に注目し、青墓という舞台が「小栗判官」にとつてどのような意味をもつのかという問題を柱として考察をすすめていく。

第一章では、青墓の歴史的過程と文芸的な位置づけを時系列に整理する。それを踏まえ、第二章では絵巻『をくり』において青墓がどのように表象されているのかを検討し、作品読解における新たな視座の明示を目的としたい。

## 一、青墓の特徴と歴史

### 1 青墓の傀儡子

青墓とは、現在の岐阜県大垣市に位置し、古くは東山道の宿駅として発展した。平安時代後期の漢詩集『本朝無題詩』には、傀儡子をまとめた漢詩が七編載せられているが、ここでは青墓が傀儡子の拠点の一つであったことが確認できる。また、『拾玉集』や『明日香井集』では、青墓での印象深い逢瀬について詠まれており、『飛鳥井和歌集』の「青墓の宿にてあそびて侍ける傀儡」という一文からは、傀儡子が遊女的な側面を持ち合わせていた事がうかがわれる<sup>10</sup>。

寛治年間（一〇八七～一〇九四）以降に成立したとされる、大江匡房『傀儡子記』には、傀儡子の生活やその芸芸についてまとめられている。

本書によれば、「男は皆弓馬を使へ、狩獵をもて事と為す。或は双剣を跳らせて七丸を弄び、或は木人を舞はせて桃梗を闘はす」

と記述されており、男性は狩獵を行い、時には「木人を舞はせて」、つまり人形を操る芸を行った。一方の女性は、「朱を施し粉を傅け、倡歌淫楽して、もて妖媚を求」め、「亟行人旅客に逢ふといへども、一宵の佳会を嫌はず」という記述から、遊女としての性格がうかがわれる。これは、東山道の宿駅であった青墓が、往來の激しい土地であったため、傀儡子の女性達にとつても、顧客となる旅人が多かった事ともかわってくるだろう。また、「東国は美濃・參川・近江等の党を、豪貴と為す。」という『傀儡子記』の一文と、前述の漢詩集・歌集の記述を鑑みても、美濃の青墓は傀儡子の主要な拠点の一つであったことが改めて把握出来る。

さらに、『傀儡子記』の記述を追うと、「今様・古川様・足柄・片下・催馬楽・黒鳥子・田歌・神歌・棹歌・辻歌・漫固・風俗・咒師・別法等の類は、勝けて計ふべからず。即ちこれ天下の一物なり。誰か哀憐せざらむや。」とあり、傀儡子が諸芸能に長けていたことが確認できる。これと関連して、『梁塵秘抄口伝集』には青墓出身の遊女が今様の上手として登場している。後白河院は彼女達から今様を習ったと伝えられ、そのような傀儡子の中には、勅撰集に入集するほどの傀儡子もいた<sup>11</sup>。

青墓とは宿駅として栄え、同時に、傀儡子達の主な拠点でもあった。そして、傀儡子の女は芸能者としての側面と遊女としての側面を持ち、時代を経てもその様相は喧伝されたのである。

### 2 青墓と源氏

傀儡子の存在と共に、青墓について注目すべき点は、青墓と源

氏の関連性である。

軍記物語には、青墓長者と呼ばれる人物が頻繁に登場する。青墓宿は、青墓長者と呼ばれる統率者によって運営・管理されており、この青墓長者は大炊氏と呼ばれる一族が代々つとめていた。<sup>13</sup>源氏と青墓長者の関係がいつ頃から始まったかは不明であるが、『大炊系図』によれば、大炊行遠とその子供達が源為義に仕えており、十二世紀以降には両者の関係が始まっていたことが推測できる。<sup>15</sup>

また、軍記物語には在地の女性達についても詳細に描かれている。『平治物語』では、青墓宿の主であり遊女でもある「大炊」という女性統率者が登場しており、源氏への助力に尽くすほか、「美濃国青墓の宿に、大炊と申す遊君は、頭殿年来の御宿の主なり。」という一文からも、義朝の愛妾であったことが理解できる。<sup>17</sup>

なお、同記事には義朝の愛妾・大炊のほかに、義朝第一の郎党である鎌田兵衛の愛妾・延寿の存在が提示されている。加えて、『平治物語』には義朝の息子・頼朝も、大炊ら青墓の女性達によって平氏の追っ手から匿われた記事が載せられており、さらに、大炊の娘・夜叉御前が兄・頼朝の捕縛を嘆き悲しんで杭瀬川に入水し、大炊がその菩提を弔うため出家したと記載されている。<sup>18</sup>『保元物語』は、女長者・大炊の姉の存在を明示し、義朝の父・為義の子を産んだが、二人の子供達は源氏の凋落により次々と誅せられ、大炊の姉もその悲しみから入水したと伝える。<sup>19</sup>

これらからは、青墓が源氏の策源地であるほか、愛妾がいる事も相まって、源氏の一門が度々訪れる土地として伝えられたこと

が推測できるといえよう。<sup>20</sup>

『吾妻鏡』建久元年（一一九〇）十月二十九日条には、以下の様な記述がある。

廿九日庚戌。於青波賀駅。被召出長者大炊息女等有纏頭。故左典殿都鄙上下向之每度。令止宿此所給之間。大炊者為御寵物也。仍被重彼舊好之故乎。故六條廷尉禪門寂後妾。乙若以下四人幼息母。大炊姉。<sup>21</sup>

『吾妻鏡』の記事によれば、鎌倉幕府成立後の建久元年、源頼朝は上洛する途中に青墓へ立ち寄り、青墓長者の大炊やその娘を召し出して纏頭（＝褒美）を与えたという。この褒美は、青墓長者による源氏への援助に対する謝礼とも、また代々の棟梁達と所縁ある故とも考えられ、源氏と青墓の浅からぬ因縁がうかがえる。

青墓と源氏に関して、青墓の女性達にまつわる挿話以外に、多くの諸本に記されているのが、義朝とその息子である朝長の説話であろう。

『平治物語』によれば、青墓で大炊達の尽力により追っ手から逃げた義朝一行であったが、息子の朝長が先の戦闘における傷の悪化で動けなくなる。そこで、朝長は義朝に介錯を頼み、朝長の首と遺体は青墓に埋葬されたと伝えられる。この事は、『平家物語』（屋代本）、『帝王編年記』、『尊卑分脈』にも記されており、朝長の死の状況には若干の差異があるものの、青墓がその舞台である事だけが変わりがない。やや時代が下った『義経記』でもこれらのことを受け、朝長は美濃青墓で死んだと伝え、美濃青墓宿を「義朝の浅からず思ひ給ひける少将が跡」とする。<sup>22</sup>また、謡曲

「朝長」では、青墓を舞台に自害した朝長を鎮魂する構成となっている。<sup>26</sup>軍記物語や編年史に記された朝長説話は、青墓を舞台に哀話要素を含みながら脈々と伝え続けられていくのである。源氏は要衝地である青墓を訪れ、そこに住する女性達は命を賭けて源氏に助力する。青墓とは、敗走する源氏の哀話の舞台であり、かつ、源氏のために奔走する女達の哀話の舞台として描写されているとも言えるだろう。

### 3 青墓の衰退

ここまで、青墓は芸能に秀でた傀儡子を輩出する土地であり、また、源氏を援助する遊女達が居住する土地であった事について確認した。次は、青墓が宿駅としていかなる発生と発展を遂げたのか、その歴史的過程についてまとめていきたい。

文治元年（一一八五）十一月、頼朝は鎌倉・京都を結び、人馬の往来が盛んな東海道に関して「駅路の法」を制定した。鎌倉幕府はこの法によって新たな宿駅を設定し、加えてその体系化に努めようとしたのである。<sup>27</sup>その一環として、『吾妻鏡』建久五年（一一九四）十一月八日条には「被支配街道駅々。大宿分八人。小宿分二人云々」と、宿駅に対する人員賦課が記されている。

この記事について『大垣市史（青墓編）』によれば、青墓は宿駅の中でも「大宿」として機能していたという。<sup>28</sup>『吾妻鏡』建久元年（一一八九）十二月十六日条、『吾妻鏡』建久六年（一一九五）六月二八日条、また『神道集』巻七「上野国勢多群鎮守赤城大明神事」は、青墓往来を伝える記事であり、十二世紀末までは青墓

が主要な宿駅として機能していた事が把握できる。

しかし、次第に青墓周辺にも新たな宿駅が発生していった。例えば、杭瀬川右岸の金生山（赤坂山）南麓に位置する赤坂は、鎌倉時代以降に発展していった宿駅である。現在の赤坂町中部に比定されているが、江戸時代には中山道の宿場町として栄え、杭瀬川の赤坂河岸開設によって現赤坂東町にまで及んだ。また、赤坂から青墓を過ぎたところにある垂井は美濃路を分岐する追分宿として発展し、南宮神社の参道が通じている事もあって宿駅として賑わった。『吾妻鏡』には、美濃に新たな宿駅を作る様に命じた事と、その設置の進捗が芳しくない事が載せられており、赤坂・垂井もこのような時期に宿駅として成立していったと推測される。『吾妻鏡』貞永四年（一一三五）十一月十三日条には、すでに赤坂宿の前身である杭瀬川駅が登場しているが、『大垣市史（青墓編）』では、「この杭瀬川駅はいつできたかは分からないが、鎌倉幕府の初め頃までは公設の宿駅は青墓にあつたのであるから、その後において公設の宿駅は杭瀬川に移されたことになる。そうすると青墓は宿駅ではなくなり、昔栄えた宿駅の面影を遺すだけの茶屋の一軒位が、名残を留める程度になってしまったのであろう。」と述べられている。

飛鳥井雅有による紀行文『春の深山路』には、以下の様な記述がある。

青墓の宿は昔その名高き里なれど、今は家も少なう、遊女もなかめり。故宰相の「名は大方の青墓の里」と詠み給へりしも、げにはかなく、跡とも見えず。<sup>29</sup>

『春の深山路』は、弘安三年（一一八〇）の飛鳥井雅有の旅を

もとに記されているので、十三世紀後半には、青墓はすでに荒廃した様相を帯びていたのだろう。榎原雅治氏は、時代が下った十六世紀前半の美濃では、近隣諸国間の勢力争いにより争乱と下克上が頻発し、旅人達は美濃廻りのルート（＝美濃路）自体の通行を避けていたと指摘している。また、近世における青墓も主要な宿場として機能していることはなく、あくまで赤坂宿の助郷にすぎない。十三世紀以降、青墓は『春の深山路』において記述されていたように、「げにはかなく、跡とも見えず」の里となり、かつての賑わいも失った宿として影を潜めていったのであろう。

本稿で扱う「小栗判官」は、中世末に広く知れ渡り、現存する諸本もその成立は十七世紀以降とされている。なぜ、はるか昔に衰退した青墓を舞台とするのか。前述したように、その理由をかつて青墓に居住したといわれる芸能者や傀儡子のみに託すには、やや長い年月があるように思われる。そこで次は、「小栗判官」が隆盛した近世の資料群にも目を向けて、青墓の位置づけについて探っていきたい。

#### 4 十七世紀以降における青墓の叙景

近世以降、小栗の舞台である青墓は、どのような場所として認識されていたのか。ここでは、「小栗判官」が隆盛した十七世紀以降の青墓に関わる記述を時系列で追っていく。

万治二年（一六五九）頃成立とされる浅井了意『東海道名所記』では、美濃青墓を筆頭として、かつての長者遊君による歓待情景が述べられている。

天竜の川上、東のはたに、池田の宿のあとあり。長者の住ける所、百間四方ばかりあり。をよそ、美濃の青墓、近江の池田、するがの手越などは、いづれも長者遊君ありて、昔は往来の武士、若き人々、門前に馬を繋ぎ、金銀を投げて、酒宴を催し、今様・朗詠の歌舞をもてあそびし所なれば、江口、神崎にもいかでか劣り侍らん。<sup>35</sup>

また、貞享元年（一六八四）に成立した貝原益軒著『東路記』では、青墓の情景通過を以下のように語っている。

青墓は、昔は宿駅なり。今は小里なり。町なし。名所なり。古歌有。長者が屋敷の跡有り。朝長の社は、青墓の西の道より北の谷のおくに四五町にあり。朝長八幡と云。その北の山上に、朝長の墓有り。<sup>36</sup>

『東路記』には『東海道名所記』同様、青墓が昔の宿駅であることと、現在は小里となっていることが記されており、加えて源氏所縁の旧跡が立地していることを伝えている。大田南畝が著した紀行文『壬戌紀行』は、これらより時代を経た享和二年（一七一一）の紀行文であるが、ここでも、青墓宿に源氏所縁の墓所があることについて述べられている。<sup>37</sup>

正徳二年（一七一二）頃成立の『和漢三才図会』には「青野ヶ原 青墓」の項目があり、義朝の妾・常磐に関する伝承と、常磐が青墓にて殺害されたとする伝承に対して異論を唱えている。同様に、享保二年（一七一七）成立の随筆『広益俗説弁』でも常磐御前が青墓で殺されたとする俗説の誤りを指摘している。<sup>38</sup>

さらに、十九世紀に至ってからの青墓に関する記述を見てみたい。文化元年（一八〇四）に遠山景普が著した『続未曾有記』で

は、青墓について以下の通り記述されている。

青野村、青墓の宿、今は小里なり。里中左に、朝長の墓、ならびに義朝、義平の石塔もあり。寺の境内なり。長者の屋敷跡は、「北八丁程の田中にあり」と云。其外、牛若丸の植しよし竹、学の清水など、由来を語れども、例の蛇足なり。

前述の資料群同様、ここでもやはり青墓が小里である事、源氏の旧跡や青墓長者屋敷の跡がある事を伝えている。ほかにも、文化二年（一八〇五）に刊行された『木曾路名所図会』の青墓には、「朝長墓」、「長者屋敷」、「義平・義朝・朝長」の石塔などが描かれており、詞書には、やはり青墓が小里であることのほか、青墓長者の屋敷跡や源氏墓所、照手所縁の竹塚の存在が記されている。さて、ここまでみてきた資料群の特徴は、青墓の今昔を比較する記述が明瞭であること、そして、青墓における源氏ゆかりの旧跡について記述が多いということであろう。「昔は往來の武士、若き人々、門前に馬を繋ぎ、金銀を投げて……」「昔は宿駅なり。」とかつての繁栄を述べる一方、「今は小里なり」と現在の衰退様相を伝え、その比較が見て取れる。

青墓は、十三世紀以降、衰退して「小里」となってしまう。近世に至ってもその様相は変わらないが、著名な旧跡として各所で語られていく。その背景には、源氏や青墓長者といった、青墓における源氏伝承が人々に強く認知されていたことは十分考えられるのではないか。

## 二、絵巻『をくり』における青墓

ここからは、前章で言及した青墓の特徴と歴史をふまえた上で、「小栗判官」における青墓について絵巻『をくり』の詞書を中心に検討したい。

はじめに、絵巻『をくり』（以下、絵巻）の詞書をもとに、「小栗判官」のあらすじについて紹介する。

鞍馬寺・毘沙門天の申し子として生まれた小栗は、家柄・文武の才に優れながらも、「不調」の性格ゆえ、度重なる「妻嫌い」の果てに大蛇と契りを交わしてしまう。この醜聞を耳にした父・兼家は、小栗を常陸へ配流する。

常陸に流された小栗は、ある時、旅の商人・後藤から武蔵相模の郡代である横山の娘・照手姫の美貌を耳にし、強引に婿入りをする。小栗の不躰な対応に激昂した照手の父・横山は、人喰い馬・鬼鹿毛を使って小栗を暗殺しようとするものの、計画は失敗。次に横山は酒宴における毒殺を計画し、果たして、小栗とその配下十人達は非業の死を遂げる。夫を失った照手姫は、各地で転々と身売りをされ、最終的に美濃の青墓の君の長に引き取られ、辛い水仕女の仕事に就くこととなる。

一方、冥土では小栗が閻魔大王の裁きを受けていた。共に非業の死を遂げた家臣達が閻魔大王に助命を訴えた事で、小栗は現世へ生き返る事となったが、生き返ったその姿は、目・耳・口が不能の醜い餓鬼の姿であった。本復を目指し、土車に乗って熊野本宮湯の峯を目指す小栗の道行が始まった。小栗は餓鬼阿弥と呼ば

れ、土車は各地で代る代る曳かれていき、青墓では照手姫と邂逅する。照手姫はその正体を小栗と知らないまま、三日間の暇を得て土車を曳く手助けをする。青墓に帰らねばならない三日目、照手姫は餓鬼阿弥の胸札に、本復したら青墓に寄って欲しいとの旨を書き添えて、青墓へ帰還する。

その後、熊野で本復を果たした小栗は、青墓で照手姫との再会を果たし、大団円をむかえる。

以上が物語の梗概であるが、では、「小栗判官」の諸本において、青墓はどのように描かれているのだろうか。

「小栗判官」における青墓は、人買いに売られた照手姫が水仕女として働く場所であり、また、小栗との再会を果たす場所でもある。諸本が成立した頃の青墓は、『春の深山路』や『東路記』で述べられていたとおり、「げにはかなく、跡とも見え」ないような「小里」となっていたはずである。しかし、「小栗判官」における青墓はそのような荒廃した青墓の姿とは乖離している。以下は、絵巻における青墓の情景描写である。

十六人の下の水仕えをば、一度にはらりと追ひ上げて、照手の姫に渡るなり。「下る雑駄が五十匹、上る雑駄が五十匹、百匹の馬が着いたは。糠を飼へ。百人の馬子どもの、足の湯・手水・飯の用意つかまつれ。十八町の野中なる、御茶の清水を上げさいの。百人の流れの姫の、足の湯、手水、お鬢に参らい。小萩殿」。こなたへは常陸小萩、あなたへは常陸小萩と召し仕えども、なにか照る日月の申し子のことなれば、千手観音の影身に添うて御立ちあれば、いにしへの十六人の下の水仕より、仕舞ははやうおいである。

「小栗判官」における青墓は、「百人の流れの姫」が居住し、多くの遊女や往来する馬の世話のために「十六人の下の水仕」が必要とされ、非常に大規模なものである<sup>④</sup>。決して「げにはかなく、跡とも見えぬ」の青墓ではない。なお、絵巻から正徳・享保頃に成立した豊孝本『おくりの判官』まで、一貫してこのような青墓が描かれている。

さて、ここでもう一点、青墓について注目すべきは、青墓の君の長の存在である。

以下は、照手姫が青墓の君の長に引き取られるまでの絵巻の詞書である。

上り大津の商人が、値が増すとて売るほどに、商ひ物の面白や、(a)あとよさきよと売るほどに、美濃の国青墓の宿、よろづ屋の君の長殿の代をもつて十三貫に買い取つたはの、諸事の哀れと聞こえ給ふ。

君の長は御覧じて、(b)あらうれしの御事や。百人の流れの姫を持たずとも、あの姫一人持つならば、君の長夫婦は、楽々と過げうことうれしや。」と、一日二日はよきに寵愛をなさるるが、ある日の雨中のことなるに、姫をお前に召され、(c)なう、いかに姫。これの内には国名を呼うで使うほどに、御身の国を申せ。」

そして、照手姫が売られていくこの状況と、非常に似た描写が見られる説経作品が存在する。それは、「さんせう太夫」において、安寿・厨子王の姉弟が人買い・山椒大夫に引き取られる場面である。以下は与七郎正本『さんせう太夫』の本文である。

さて宮崎の三郎が、兄弟の人々を二貫五百に買い取つて、

(a) あとよさきよと売るほどに、ここに丹後の国、由良の港のさんせう太夫が代をもつて十三貫に買いたるは、ただ諸事の哀れと聞こえ給ふ。

太夫はこの由ご覧じて、「(b) さてもよい譜代下人を、買い取つたることのうれしやな。孫子・曾孫の末までも、譜代下人と呼び使はうことのおうれしさよ。」と、喜ぶ事は限りなし。ある日のうちの事なるに、兄弟をお前に召され、「これらのうちには、名もない者は使はぬが、御身が名をば何と申す。」とお問ひある。姉御この由きこしめし、「さん候。それがし兄弟は、これよりも奥方、山中の者にてござれば、姉は姉、弟は弟と申して、つひに定まる名もござない。ただよき名をつけてお使ひあれ。」太夫この由きこしめし、「(c) げにもなることを申す者かな。その儀にてあるならば、国里はいづくぞ。国名を付けて呼ぼう。」との御誕なり。

傍線部に注目したい。(a) に関しては、照手姫／姉弟が各地を漂泊後に売られていく場面であり、絵巻と与七郎正本『さんせう太夫』は、ほぼ同様の詞書きを持つ。(b) に関しては、その詞書は異なるものの、君の長／さんせう太夫が良い人材を得た事を喜ぶ場面である。そして(c) では、買い取った照手姫／姉弟に、名前をつける場面へと続く。残存するすべての「小栗判官」諸本、「さんせう太夫」諸本において、この(a) から(c) へ向かう一連の流れが見られ、絵巻と与七郎正本『さんせう太夫』の詞書は、特に類似性が見られる。

再度絵巻に目を向けると、君の長は照手姫に「伊勢小萩」という国名を付けた後、遊女になる事を強いる。しかし、照手姫が

それを拒否しようとする、君の長は以下のような言葉をつきつける。

「なういかに常陸小萩殿。さて明日になるならば、これよりも蝦夷・佐渡・松前に売られてに、足の筋を断ち切られ、日に一合の食を服し、昼は粟の鳥を追ひ、夜は魚・鮫の餌にならうか。十二単を身に飾り、流れを立てうか、あけすけ好め、常陸小萩」

照手姫を遊女とするために、脅し文句を巧みに使う君の長であるが、同様の言葉が「さんせう太夫」では実行されてしまう。以下は、与七郎正本『さんせう太夫』において、厨子王・延寿が売られた後に、残された母の処遇を語る場面である。

船頭この由聞くよりも、「何と申すぞ。一人こそは損にすることも、二人まで損にはすまい」とて、持つたる權にて打ち伏せ、船梁に結つけて、蝦夷が鳥へぞ売つたりけり。蝦夷が鳥の商人は、能がない職がないとて、足手の筋を断ち切つて、日に一合を服して、粟の鳥を追うておはします。これは御台の物語。

これらと比較してみると、「小栗判官」の君の長と、「さんせう太夫」の人買いやさんせう太夫の言動は類似した描写が見られ、君の長には、さんせう太夫達と同様の無慈悲な人物像が組みこまれているといえるだろう。

ただし、太夫達と君の長の末路には大きな隔りがある。「さんせう太夫」の結末では、太夫達は権力を得た厨子王によって死罪に処せられる。一方、「小栗判官」の君の長は、照手姫を酷使した咎で一度は死罪を命じるものの、照手姫の口添えによって死

罪になるどころか、「美濃国十八郡一式進退、総政所」の褒美を与えられるのである。

説経の結末における信賞必罰は、非常に明確である。「しんとく丸」では、しんとく丸を追いつ出した義母と義弟は、死罪を命じられる。「さんせう太夫」についても、前述の通り、さんせう太夫を始め、その息子・三郎、また、関わった人買い達もろとも死罪に処す。

このように、説経作品における無慈悲な登場人物は、結末では厳罰の対象となるのがほとんどであるが、君の長に関しては、例外的に褒賞の対象となるのである。

さて、ここからは青墓を巡る絵巻の詞書を、他の諸本と比べながら、微視的に取り上げていきたい。

まず確認できることは、絵巻には青墓描写に関して諸本と異なる点が二点存在することである。一つ目に、絵巻には照手姫の難題解決譚が存在しないことが挙げられる。

この難題解決譚については、奈良絵本の記述を引用する。

その後長殿は、料足七文をとりいだし、「やあいかに常陸小萩よ。此七文にて、七色の唐名のものを買、うて参らひよ。いかに／＼とお申しある。常陸小萩は聞こしめし、「それ料足七文にて、七色の唐名の物は買はれまい。七色の名をさへお申しなくして、何としてかは買ふべきぞ、長殿さま」と、お申しあれば、長はこの由聞こしめし、「此七色の唐名の物、一色も違ふならば、流れを立てうと思はひの」：

魯し文句を突きつけながら、遊女勤めを強いる君の長に対し、照手姫は決して首を縦に振らない。そこで君の長は、七文で七色

の唐名のものを買ってくる難題を解決できなければ、遊女として勤めに出よと迫る。しかし、照手は機転を利かせて難題を解決し、遊女になる代わりに水仕女の仕事を辱めるのである。

二つ目の相違は、君の長の呼称に関してである。絵巻では「君の長」と呼称するのに対し、それ以外の諸本では「長」という呼び名に統一されているのである。

絵巻のみに使用される、君の長という呼称は何を表しているのだろうか。ここではその呼称が、他作品においても登場しているということに注目して考えたい。

それは、幸若舞曲「烏帽子折」である。「烏帽子折」は室町時代成立の判官物で、義経の元服や盗賊熊坂長範を撃退する挿話などがおさめられている。そして、この作品にも君の長とよばれる青墓の遊君の頭が登場するのである。

物語では、主人公・牛若が、身分をやつし、商人の下人として青墓宿を訪れる場面が描かれている。青墓宿の君の長は、牛若が草刈笛を吹く姿を見て、誰も分からなかった草刈笛の由来を理解し、牛若の正体を下人ではないと見破る。その後、君の長は、牛若を呼び出し、自らについて語りはじめるのである。

其後、君の長、浜千鳥を召され、「以前に笛吹たる京藤太とやらんは、思へば見る所の有るに、こなたへ連れて参れ」「承る」と申て、牛若殿を具足し申す。(中略)「なふ、御身は何をの給ふぞ。自らは義朝の妻女なり。万寿の姫と申て、忘れ形見の御座候ふを、いらか寺の籠に出家になし置き申なり。扱このあなたに、一間四面に光堂を建て、阿弥陀の三尊を安置申、義朝、悪源太、朝長父子三人の御影をあらはし申

也。もしも源氏のゆかりか、りにてましまさば、焼香なむどあれかし、なふ。あら心深の冠者殿や<sup>④</sup>……

「烏帽子折」における君の長は、源氏所縁の義朝の愛妾であった。この君の長には、前章で取り上げた『平治物語』や『吾妻鏡』などに登場する、大炊などの青墓長者の姿が投影されていると言っても過言ではないだろう。

では、ここまで絵巻の青墓描写と他の諸本との相違について取り上げてきたが、ここから考えられる事は何だろうか。

まず、一点目に、照手姫の難題解決譚について考えてみたい。照手姫の難題解決譚は、奈良絵本をはじめ後続諸本においても取り上げられているが、絵巻のみその箇所が欠如している。横山重氏の論説を考慮すれば、絵巻と奈良絵本より古くに存在した「原・小栗判官」において、照手姫の難題解決譚が存在した可能性も考えられる<sup>⑤</sup>。だが、絵巻が「原・小栗判官」の詞書から難題解決譚を削り取ったか、または、絵巻成立よりあとに難題解決譚が挿入されたのかは、現状では判別がつかない。ただ一つ考えられる事は、絵巻の詞書は、その他の諸本とは異なる系列において発展していった可能性が高いのではないかとすることである。

二点目に、なぜ絵巻のみが、照手姫が身を売られる遊女宿の長を「君の長」と呼称するのだろうか。

この姿勢からは、幸若舞曲『烏帽子折』に描写された青墓を少なからず踏襲していることが考えられよう。なお、幸若舞曲『烏帽子折』は、『平治物語』や『吾妻鏡』などの軍記物語の伝承である一方、『吾妻鏡』で褒美を与えられた青墓長者のように、武家

からの褒賞される人物の性質を受け継いでいるのではないだろうか。絵巻『をくり』の青墓とは、軍記物から幸若舞曲などの作品において受け継がれてきた、源氏所縁の青墓長者が君臨する、繁栄する青墓像という描写の延長線上に位置していると考えられるだろう。

#### おわりに

本稿では、「小栗判官」における新たな読解を目指し、絵巻『をくり』を中心に青墓について検証を行ってきた。宿駅が発展する中世から、「小栗判官」が隆盛する近世に至るまでの青墓を追ってみると、青墓宿は衰退しても、文芸上においては源氏と青墓長者の存在を背景として繁栄した様相が喧伝され続ける事が分かる。

そして、「小栗判官」もその例外ではなく、繁栄する青墓を舞台に、物語は展開していく。ただし、諸本の中でも絵巻『をくり』の青墓描写については、他の諸本と一線を画した独自の詞書で構成されており、軍記物から幸若舞曲などの作品において受け継がれてきた青墓の姿——源氏所縁の長者が管理をする繁栄する青墓の姿が、より顕著に投影されているのではないだろうか。

なぜ、絵巻のみが独自の詞書を取り込んでいるのかは、その成立形態や、当時の他作品や他の絵巻との比較、社会背景なども関わっているかと思われるが、この点については、今後の検討課題とした。

〔付記〕一部の引用資料については、通読しやすい様に、適宜仮名を漢字に、又は漢字を仮名に改めた。漢字は、現在の標準的な表記法に従い、旧漢字は新漢字に改めた。底本に句読点、段落がない場合、必要に応じ、句読点を付け、段落を設けて改行した。また、会話・一人語りの部分には、「」または『』を付した。

一部引用資料において、強調の為に、傍線・傍点を付している。

説経本文は、横山重編『説経正本集』（角川書店 一九七八）

から引用している。またその際適宜、東洋文庫『説経節―山椒太夫・小栗判官他―』（荒木繁・山本吉左右編注、平凡社、一九七三）と、新潮日本古典集成『説経集』（室木弥太郎校注、新潮社、一九七七）を参考にした。

## 【注】

（１）日暮小太夫の『おぐりてててめ物かたり』に、「五せつきやう」という注記がある。

（２）この点については、既に瀬田勝哉氏が疑問を呈している。

〔中・近世の転換期、ほんとうに青墓周辺でこのような女性集団が活動していたのだろうか。「をくり」の物語が持つような強烈なエネルギーを噴き出させる社会的、文化的環境がその頃の青墓にあったであろうか。（中略）その時代をもとにしてつくられた青墓像を、そのまま単純に四百年も下った中世末から近世初めに持ち込み現実の姿とするのは、あまりにも無謀すぎないだろうか。それなりの証明があるのだ。（瀬田勝哉「説経『をくり』の離陸——「引く物語」は何を語るか——」（『武蔵大学人文学会雑誌』四一—二、二〇一〇／一）

（３）絵巻『をくり』以外のテキストについては以下の通りである。奈良絵本『おぐり』（近世初期）、古活字本『をくり』（寛永初年刊、古活字版、上中下三巻のうち下巻のみ残存）、草子『おぐり物語』（寛文末延宝初年刊、鶴屋吉右衛門版、中巻・下巻のみ残存）、『おぐり判官』（延宝三年孟夏刊、正本屋五兵衛版）、佐渡七太夫豊孝本『をくりの判官』（正徳・享保頃刊、江戸惣兵衛版）

（４）段別のない説経の曲目としては、『かるかや』『小栗判官』『さんせう太夫』『しんとく丸』の四作品が挙げられる。室木弥太郎「語り物（舞・説教・古浄瑠璃）の研究」（風間書房 一九七〇）参照。

（５）先行研究では、助詞「て」と間投詞「に」を合わせた「てに」の用例を持つ説経作品は、比較的古い詞書をもつと位置づけられている。高野辰之氏はこの用例を伊勢方言に由来するものではないかと指摘し、室木弥太郎氏も、説経者の中でも伊勢を出自とする有力な一群があつて、彼らによって「てに」が語り口として波及したのではないかとという仮説をたてている。室木弥太郎「語り物（舞・説教・古浄瑠璃）の研究」（風間書房 一九七〇）、高野辰之「近世の語り物」（『文学』二二—一九三四／二）参照。

（６）横山重編『説経正本集』（角川書店 一九七八）

（７）西田耕三氏は、説経冒頭の本地語りに注目し、その語り口の位相を比較した結果、へ本地を説きたてて広め申す」という語句が古浄瑠璃等には見られず、説経の一部作品のみで使用されている事を指摘し、絵巻『をくり』についても該当すると論じ

た。西田耕三『生涯という物語世界 説経節』（世界思想社一九九三）。

(8) 「青墓草踈馬待春。濃州傀儡子所居謂之青冢。」（『本朝無題詩』八〇 藤原敦光詩）

(9) 「一夜見し人の情けは立ちかへり心に宿る青墓の里」（『拾玉集』巻四 詠百首和歌）

(10) 「吾妻へくだるとて、青墓の宿にてあそびて侍ける傀儡、のぼるとてたづねければ、みまかりけるよし申をききて／たづねばやいづれの草のしたならん名をおほかたの青墓の里」（『明日香井集』内裏御会）

(11) 『傀儡子記』本文は、日本思想大系『古代政治社會思想』より引用した。

(12) 「或人申て云、「さはのあこまるとて、青墓の者、歌数多知りたる上手、この程上りたり」と申。（中略）乙前もここ（青墓）の女にて有し成べし。」（『梁塵秘抄口伝集』）

(13) 「肥後の国の遊君、檜垣姫は後撰集に入り、神崎の遊女、宮木は後拾遺集をけがす。青墓の傀儡、名曳は詞花集をゆり、江口遊女、抄は新古今の作者なり。」（『十訓抄』下・巻一〇）、  
「東へまかりける人の宿りて侍りけるが、あかつきにたちけるによめる／はかなくも 今朝の別れを惜しきかな いつかは人をながらへてみし」（『詞花和歌集』くゞつなびく）

(14) 『大炊系図』（『大垣市史（青墓編）』所収）には、「某青墓長者」「青墓長者 大炊」「家遠 青墓長者」「青墓長者 長七」「某 青墓長者 長七」の名が見える。

(15) 『大炊系図』『行遠』の項目には「仕源為義」とあり、その

子「政遠」の項目には「仕源為義」、「後仕左馬頭義朝」とある。(16) 「大炊」という名称については、青墓の有力豪族の「氏」自体を指す場合と、源義朝の愛妾であった女長者個人を指す場合がある。このことについては水原一氏の論考に詳しい。

「大炊」は平治物語では青墓の宿の女長者である。（中略）だが美濃辺に伝わる何種かの青墓長者の系図では「大炊」は豪族としての姓であり、長者は男性である。思うに古く女系長者姓であった青墓の傀儡が鎌倉中頃からであろうか、男系の支配に交代して行き、道信（道心）はその男性長者の名で、青墓を中心としてさらに野上・鶯巢・赤坂・平野等々に経営の縄張りを広げ（その傾向は平治の頃に既に見えている）、傀儡すなわち遊君を統率して、その芸能をも管理していたのであろう。」（水原一『延慶本平家物語論考』加藤中道館 一九七九）

(17) 陽明文庫蔵本『平治物語』中巻「金王丸尾張より馳せ上る事」参照。

(18) 金刀比羅宮本『平治物語』下巻「頼朝生捕らるる事付けたり夜又御前の事」参照。夜又御前に関する記事は金比羅本などには載せられていないもの、古い底本には収録されていない。なお、夜又御前の母親は、九条家本の類では大炊とするが、金刀比羅本系統だと大炊の娘・延寿と伝えている。

(19) 『保元物語』「義朝幼少の弟悉く失はるる事」、同「為義の北の方身を投げ給う事」参照。

(20) 陽明文庫蔵本『平治物語』や『吾妻鏡』では、大炊は源義朝の「寵物」であるが、金刀比羅本『平治物語』では、義朝の愛妾は延寿であり、大炊は延寿の母となっている。

(21) 『吾妻鏡』本文は、新訂増補国史大系『吾妻鏡』より引用した。

(22) 陽明文庫蔵本『平治物語』「金丸尾張より馳せ上る事」、「頼朝生捕らるる事」参照。

(23) 「義朝ハ朝長ハカリ相具シテ、美濃国青墓ノ遊君カ家ニ一夜留ケルカ、イカ、思ケン、ソコニテ朝長ヲハ蜜カニ頸ヲ昇切テ、「是ハ足ヲ痛メハ留置」トテ、衣引襟テ遊君ニ云置テ」

『平家物語(屋代本)』「剣巻・上」、「死於美濃国青墓遊女宿 平治二年正月二日父刺殺之埋其頭了」(『尊卑分脈』「朝長」項、「義朝二男朝長於美濃国青墓宿自害。生年十六。」「帝王編年記」の平治元年十二月二十九日条)

(24) 「弟の朝長も千束が崖と申す所にて、山法師大矢の注記が射ける矢に、弓手の膝射られて、美濃の国に青墓といふ所に死ににけり。」(『義経記』「義朝都落の事」)

(25) 『義経記』「鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事」参照。

(26) 「夜更人静まつて後、朝長の御声にて、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と二声宣ふ、鎌田殿参り、こはいかに朝長の御自害候と申させ給へば、義朝驚き御覧ずれば、早御肌衣もくれないに染みて、目もあてられぬ有様也。」(『謡曲百番』「朝長」)

(27) 『吾妻鏡』文治元年十一月二十九日条参照。

(28) 『大垣市史(青墓編)』(大垣市 一九七七)

(29) 「十六日丙申。雪聊散。青波賀。」(『吾妻鏡』建久元年十二月十六日条)、「廿八日辛巳。令着御于美濃国青波賀。」(『吾妻鏡』建久六年六月二十八日条)、「彼ノ宣旨ノ御使ハ、愛超河ヨリ三日路先立テ、国々ノ宿ニ触走通々々下ケレハ、中納言殿

都ヲハ主従七騎ニテ出ラレタリケレハ美濃国青墓ノ宿ニ付給ケレハ其勢一千余騎ニ成ケリ。」(『神道集』卷七「上野国勢田群鎮守赤城大明神事」)

(30) 「三日乙巳。美濃国守護人相模守惟義申当国路駅可加新宿所々事。」(『吾妻鏡』文治三年三月三日条)、「廿六日丙午。海道可建立新宿事。度々雖有其沙汰。未令遵行之由。」(『吾妻鏡』建暦元年六月二十六日条)

(31) 「於株河駅。彼施于住反浪人等。於尋縁邊上下向輩者。勘行程日数与旅粮至稱可止佳由之族者。預置于此莊園之間百姓被扶持之云々」(『吾妻鏡』貞永四年十一月十三日条)

(32) 本文は、新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』より引用した。

(33) 榎原雅治『中世の東海道をゆく 京から鎌倉へ、旅路の風景』(中公新書 二〇〇八)

(34) 『角川歴史地名大辞典』「青墓」項による。また、『日本歴史地名大系』(平凡社)の「青墓」項には、「遊女の宿としての青墓のその後の歴史はほとんど不明であるが、年未詳一月八日の浅野長吉折紙(市田靖氏所蔵文書)は「大墓宿町人中」に宛てて、戦乱によって逃げ出した町人を「大墓宿」に還住させようとしており、遊女の宿としての性格は失いながらも、戦国期までは東山道の宿として存続していたと思われる。」とある。

(35) 本文は東洋文庫『東海道名所記』より引用した。

(36) 本文は新日本古典文学大系『東路記 己巳紀行 西遊記』より引用した。

(37) 「土橋を渡りて青墓の宿なり。左の方に弘醫山円願寺とい

ふ廃寺あり。義朝、朝長、義平の墓ありといふ。(中略) 右の畠の中に一本の松あり。照手の松といふ。側にてる手の清水もありといふ。」(新日本古典文学大系『寝惚先生文集 狂歌才藏集 四方のあか』)

(38) 「垂井より五町ばかり東、相並んで之れ有り。源義朝の妾常磐と名づく。義朝亡んで後、清盛の妾と成り。又棄てられて義経を慕ひ、此の処に至り青墓の盜賊が為に害せらるの説甚だ虚なり。清盛が妾と為り、一りの女を生み、棄てられて後、復た一条の大藏卿長成が妾と成りて数子有り。」(日本庶民生活史料集成(厚徳社)『和漢三才図会』)

(39) 『広益俗説弁』「常磐前、青墓にて殺さる、説」参照。

(40) 本文は叢書江戸文庫『続未曾有記』より引用した。

(41) 奈良絵本のみ、「十二人の水仕女」となっている。

(42) 本文は、新日本古典文学大系(岩波書店)『舞の本』により引用した。

(43) 注6参照。

(こまつ・あき)

千葉大学大学院人文社会科学科博士前期課程二〇一三年修了)